



会議レポート

DICOMO2015 シンポジウムの 舞台裏

突然のお願い

時は2014年の7月に、当時NECの中田登志之さん（現東京大学）から「DICOMOを手伝って」というメールが届いたことに始まる。「座長のお願いですか?」「違う。来年のプログラム委員長をお願い!!」最初は、何のことかさっぱり分かりませんでした。NECがDICOMO2015の主幹事になり、NEC関係者のプログラム委員長を探しているという話に、やっと立場を理解しました（私は2008年までNECにお世話になっていました）。「もっと良い人がいるでしょ」「いない」「もっと年配の人の方が」「君も十分にシニア」などとやりとりしているうちに、いつの間にか大役を仰せつかることに。

DICOMO2015

DICOMOとは、ご存知、「マルチメディア、分散、協調とモバイルシンポジウム」であって、毎年、初夏に開かれる「通信、モバイル、ユビキタス、セキュリティ...」分野の合同研究会です。マルチメディア通信と分散処理(DPS)研究会、グループウェアとネットワークサービス(GN)研究会、モバイルコンピューティングとユビキタス通信(MBL)研究会、コンピュータセキュリティ(CSEC)研究会、高度交通システムとスマートコミュニティ(ITS)研究会、ユビキタスコンピューティングシステム(UBI)研究会、インターネットと運用技術(IOT)研究会、セキュリティ心理学とトラスト(SPT)研究会、コンシューマ・デバイス&システム(CDS)研究会、デジタルコンテンツクリエイション(DCC)研究会、という合わせて10の研究会が共催しています。2015年で19年目を迎え、7月8日から10日に、岩手県八幡平市安比高原のホテル安比グランドにて開催されました。参加者数417名、論文発表は279件で、発表者中20歳代が70%という若さに溢れる研究者の祭典です。冬ならば、スキー場のメインゲレンデ前になる大会場も、400人の聴衆で満席状態になり、熱気むんむんです(図-1)。



図-1 400名が集うメイン会場の様子

プログラム委員長の仕事

プログラム委員長の仕事は、「共通テーマを決めて、招待講演者を選んで、優秀論文を選べばよい」。これなら、私にもできそうと、共通テーマ決めから開始しました。まず、過去のテーマを調べて分かったことには、ほとんどの有望な技術キーワードはすでに使用済みです。そこで、自称「走る研究者」^{☆1}は「2020年、東京五輪」に注目しました。東京五輪で利用できる技術、そして、世界に通用する技術の研究を目指し、少し抽象的とは思いつつ、2015年の共通テーマを「世界をむすび、未来にいどむ」に決定。

招待講演者については、「スポーツ界からメダリストを呼ぼう」と、コネのないところに、策を弄したのですが、早々に断念。それならばと、メダリストを計測・分析している研究者にお願いしようと方針変更して、東京大学大学院の工藤和俊先生をご紹介いただきました。工藤先生は、白鵬関の体幹測定で有名な方で、「トップアスリートの熟練技：何を感じ、どう動くか」と題してお話いただきました。白鵬関のバランス感覚の良さや、立ち合いの力の抜き方と入れ方の測定に始まり、スキージャンプの金メダリストのアマン選手のジャンプ中の背筋の動かし方。さらには、トップドラマーのスティックさばきなど、超一流でしかなし得ない身体運動を計測・分析する話は、情報関係の研究者にも魅力的でした。

残る仕事は優秀論文の選択ですが、その前に、そこに至るまでのシンポジウムの様子を報告しておきます。

デジタルコンテンツ制作発表会

一言でシンポジウムと言っても、さまざまなイベントの複合体として構成されています。初日午前には「DICOMO2015 併設デジタルコンテンツ制作発表会」がありました。実は、開催のひと月前を切った頃になって、「藤田さん、デモ展示を出して」と相成りました。安請け合いしてから、展示コンテンツを決め、卒論生のプ

☆1 趣味はマラソン。

プログラムを大幅に書き直したりと大騒動。当日までプログラミングしていた自分を揶揄して、「プログラミング委員長」と呼びます。この発表会では、楽しいデモは大歓迎ですが、せっかくの機会に発表件数がわずか4件、DICOMO本体のデモセッションの発表件数も少なく、来年への課題になります。

研究会セッション

DICOMOの特徴の1つは、対象とする研究分野の広さです。研究会を中心にテーマがまとめられ、8パレルのセッション構成で運営されます。このため、すべての発表を逃さず聞くことはできません。私は、ITS、測位、IoT、ウェアラブル、個人識別、スマートホーム、都市情報のセッションを中心に聴講しました。

面白かった発表のナンバーワンは、最優秀プレゼンテーション賞も受賞した神戸大学の倉橋真也さんの発表でしょう。「トイレトペーパーの回転に基づくトイレ使用者識別手法」というタイトルがすべてを語っています。ペーパーの芯にジャイロを装着し、その記録で個人の識別をするという研究です。着眼点が面白いだけでなく、発表中にペーパーの巻き取りデモを行い、座長の先生までも実験台にしてしまうというプレゼンテーションの楽しさが聴衆に受けました。冷蔵庫の開閉で個人識別をする研究と続けての発表であり、ほかにも身近な作業で個人識別できるものはないかと、頭を巡らせた参加者も多かったと思います。

屋内測位には、たくさんの研究発表が集まりました。GPSやWi-Fi測位など他技術を併用する研究の中で、人には気が付かれない範囲で照明の調光を変えて測位に利用したのが、同志社大学の市川耀さん。歩行経路を誤って推測し、壁にぶつかってしまったら、過去に戻って経路の推定をやり直すことで精度を高めたのが、立命館大学の吉見駿さん。この領域は、さまざまな技術との融合で、地道に測位精度を高めています。

発表の冒頭に、「前回、評価をしっかりとというご指摘をいただき、今回、成果をまとめてきました」の一言があって、好きになってしまったのが、岩手県立大学の齊藤義仰先生の運転者向けのヒヤリハットマップの自動作成の研究です。研究者は誠実さと粘りが大切です。そして、実証実験で提案の有効性が立証されたのであれば、これほど、うれしいことはないです。

ほかにも紹介したい発表は多数ありますが、誌面の制約上、省略します。しかも、シンポジウム後に予稿集を読み返してみると、見ていないセキュリティや通信分野にも面白い論文が出てくる、出てくる。パレルセッションの悲哀で残念ではありますが、致し方なし。

夜のDICOMO

昼間だけでなく、DICOMOはいつまでも続く不夜城です。ナイトテクニカルセッションでは、「花火で半田付けできるか」などの究極の実験を学生が熱く語っていました。デモセッションでは、愛知工業大学の水野慎士先生が、学部2年生の女子学生を含むグループを率いて、音と映像の華やかなデモで野口賞を3年連続受賞の快挙です。デモセッションに続いては、バーベキュー大会。煙の中で、肉や野菜を焼きつつ議論は盛り上がります。そして、さらにナイトトークを続けたい方には、プールサイドのラウンジ会場が用意され、議論は深夜（早朝？）に及びます（注：プールでは泳げません）。

授賞式

最終日のお昼に、各種の優秀プレゼンテーション賞を決定するのが、プログラム委員長の最後のお務めです。皆が昼食をとっている間に、実行委員が得点を集計し、私が最終判定します。お昼休みがなくなるので、早目にお弁当を受け取り、真っ青な空の下、1人グレンデに出て「ボッチ飯」を食べて、戦いに備えます。事務局に戻ると、NECメンバを中心とした実行委員が、分単位のスケジュールに追われて、目を血走らせて、各会場からの得点をPCに入力しています。しばらくして、「今年は、切りの良いところで点数が分かれました」との報告。同点決勝なら、高速で論文査読しようとの意気込みが外れて、あっさり決着。最優秀プレゼンテーション賞3件の中で、2件を聞きのがしたのは残念とか考える間もなく、表彰状を印刷して、一路、閉会式の会場へ。授賞式に至りました。実行委員の皆さん、プログラム委員の皆さん、運営委員の皆さん、ご苦労様でした。

後記

先日、事後の優秀論文賞の審査を行いました。このときには、私も十数編の論文をしっかりと読み、審査しました。面白いことに、プレゼンテーション賞と優秀論文賞の重複受賞は非常に少なくなっています。旬な研究と、成熟した研究の違いでしょうか。

2016年で20年目を迎えるDICOMOですが、常に変わり続けています。今年は、申し込み登録後のキャンセル数を減らすことを目的に、締切を20日遅らせ、1ページの概要投稿を課しました。結果的にキャンセル率は2.8%となり、前年の3.9%に比べて、目標達成。来年もデモセッションの活性化、シニア層の強化など、取り組みが目白押しです。今後も、皆でDICOMOを盛り上げましょう。

（藤田 悟／法政大学）